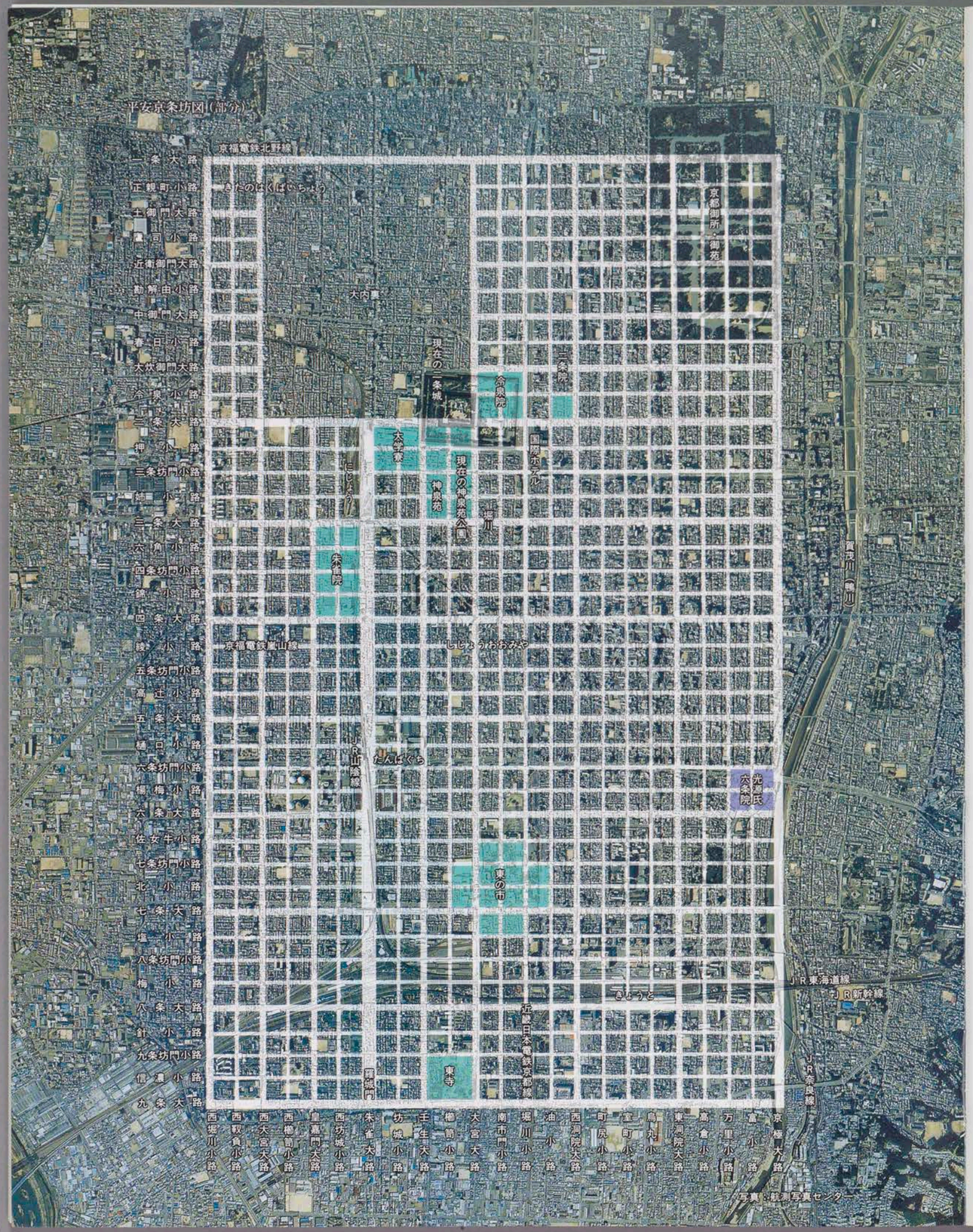
光源氏六条院の考証復元

監修：玉上琢彌
大林組プロジェクトチーム

『源氏物語』…わが国を代表するこの長編文学は、一〇〇〇年の時空を経てなお輝きを失わず、日本人の美意識の源流ともいえる世界を形成している。その中心的な舞台となったのは、平安京に花開いた光源氏のような王朝貴族たちの壮麗な邸宅、いわゆる寝殿造りの住まいであった。では寝殿造りとはどのような建築だったのだろうか。この素朴ともいえる疑問に答えてくれる遺構は、残念ながら何一つ残っていない。あまりにも有名な『源氏物語』の文学的世界と比較すると、建築的側面には意外なほど知られていないことが多いのである。

そこで大林組プロジェクトチームは今回、『源氏物語』解釈の第一人者である玉上琢彌氏の監修を得て、紫式部が思い描いた光源氏の邸宅・六条院を復元することにより、寝殿造りの建築空間へのアプローチを試みた。

画・穂積和夫



一、『源氏物語』と寝殿造り

いづれのおほん時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなきはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり（玉上琢彌・訳注『源氏物語』「桐壺」角川文庫）

この雅やかな書き出しで始まる『源氏物語』は、平安中期の一条天皇の時代、中宮彰子に仕えた女房のひとり、紫式部によって創作されたものといわれている。五十四帖に及ぶ長編物語は、光源氏を中心とした平安貴族たちが織り成す華やかな人間模様と、その裏面に潜む人間的な相克を描いて、世界的にもつとに名高い。

とりわけ「桐壺」から「幻」の巻に至るまでの主人公光源氏は、藤原氏全盛の世にあって、王家の血筋を代表する文学的ヒーローとして語り継がれてきた。物語の中で、光源氏を始めとした登場人物たちが示す「ものの感じ方」や「美へのこまやかな意識」は、時代を超えて日本人の感性のひとつの手本とされてきたのである。それはハイテク時代の今日でも、多くの人々の心をとらえて放さない。そうした王朝貴族の感情や美意識のひとつの結晶を、彼らの生活の舞台であった「住まい」にみることができる。

光源氏のような王朝貴族の邸宅を、一般に寝殿造りという。「寝殿」の名称は、『宇津保物語』にすでにみられるが、これを寝殿造りとして建築的な視点から最初に研究したのは、江戸時代後期の和学者、澤田名垂であろう。澤田名垂は、その著『家屋雑考』の中で「寝殿造りといふは、一家一構の内、中央に正殿あり。南面。其東西もしくは北に対屋といふものあり。正殿は主人常住のところ、対屋は家内眷属の居るところなり」と定義している。

その後の研究もふまえると、寝殿造りとはおよそ次のような建築ということができる。

（配置）

・敷地の周囲を築地塀（土でつき固めた塀）で囲む。
・住居の中心に、南を正面とした寝殿（主人の住まい）を置く。
・その東西あるいは北に対屋（家族などの住まい）を設ける。
・寝殿と対屋は、渡殿（通路を兼ねた建物）で結ぶ。
・寝殿の前は広い庭とし、その先に池と築山を造る。
・東西の対屋から池に向かって中門廊（廊下）を延ばし、その途中に中門（玄関）を開く。
・中門廊の南端の池畔に、釣殿を造る。
・池には、遣水と呼ばれる石組の水路を通して、水を注ぐ。

（寝殿の平面構成）

・寝殿は、母屋を中央にして、その周囲に庇の間があり、その外側に簀子縁をもつ形式が基本となる。
・庇の間の周囲は蔀戸や御簾で仕切り、また四隅には妻戸（扉）を開く。寝殿内部は隔ての障子のほか、必要に応じて几帳、屏風などの室内調度を置き、また簾や壁代を掛ける。
・対屋の構成および使い方は、寝殿に準ずる。

以上が、典型的な寝殿造りの概要とされる。しかし、典型とはいっても、こうした定義に見合う遺構は実際にはまだ発掘されていない。また、中心となる寝殿や対屋などの建物が、どういう基準で建てられたのか、あるいは基準があったのかどうかすらも判明していない。要するに寝殿造りは、その名称がよく知られているわりには、歴史的にも建築的にも未知の部分が非常に多いのである。

そこで大林組プロジェクトチームは、寝殿造りを知るための手掛かりとして、王朝貴族の生活を描いた『源氏物語』に注目した。紫式部はこの長編物語の中に、実際に寝殿造りの邸宅に暮らした者として、建築的な手掛かりを少なからず書き記している。そこには生きた形の寝殿造りの姿をみることができる。とりわけ光源氏の邸宅は、その白眉であり、紫式部がもっとも筆を尽くして描いている建物といえるだろう。

それだけに今回は、とくに紫式部の記述を重視し、その背景を読み取りながら、できるだけ原文内容に則した復元を試みることにした。そのため『源氏物語』解釈では第一人者であり、ご自身も光源氏の邸宅復元に情熱を燃やしておられる大阪女子大学名誉教授玉上琢彌氏に、文学及び有職故実などの面からご監修を戴いた。また建築面では、『源氏物語絵巻』をはじめとした絵画や古文献、さらに平安京跡の発掘調査報告などを詳細に検討し、平面のみならず立面を復元することにより、具体的なイメージを提示したいと考えた。それは紫式部の考えたフィクションの世界と、現実に存在したはずの建築の世界とを照応させ、虚実の境界をたどる中から寝殿造りの姿を描き出す試みといえる。

二、『源氏物語』にみる光源氏の邸宅

◎光源氏の邸宅（二条院と二条東院）

二条院は近ければ、まだ明うならぬ程におはして、西の対に御車寄せて降り給ふ（若紫）

『源氏物語』の中で、光源氏は、平安京の内に三つの邸宅（二条院、二条東院、六条院）を持っていたことになっている。

そのひとつ二条院は、光源氏の母、桐壺の更衣の里邸であり、光源氏その人もここで生まれたと考えられる。桐壺の更衣が病没した後、やがて光源氏は元服して左大臣の娘、葵の上と結ばれ、左大臣邸と宮中の桐壺、そして二条院に住んだ。光源氏が若紫（のちの紫の上）を引き取り、慈しみ育てたのも、この二条院である。

のちに光源氏が須磨に流された折には、紫の上が邸宅を譲られ、また「御法」巻で紫の上の終焉の場となったのも、やはり二条院であった。その意味では、二条院は物語の中で重要な建物であるばかりでなく、光源氏と紫の上にとってこの上なく思い出深い邸宅であったといえるだろう。

二条院の建築については、物語の中に「さとの殿は、修理職内匠寮に宣旨くだりて、になう改め作らせ給ふ。もとのこだち、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく作りののしる」（桐壺）とある。光源氏の父である桐壺帝が、庭もふくめて大幅な増改築を行なわせたのである。また「若紫」巻には、少女時代の紫の上が二条院に引き取られた時、その乳母の描写には、「明け行くままに見わたせば、大殿の造りざま、しつらひざま、さらにも言はず。庭の砂子も玉を重ねたらむやうに見えて、かがやくここちするに…」とある。

これらのことから、二条院が風情ある第一級の寝殿造りの邸宅であったことが十分に想像される。

その場所について、玉上氏は、二条通りと洞院通りに面している（賢木）ことから、この洞院が西の洞院であったとすれば、二条城のそばの、現在の京都国際ホテルの東北筋向い付近と推定されている。平安中期、内裏にも近いこの界隈には、貴族の邸宅が数多く立ち並んでいたのである。

続く二条東院は、光源氏が須磨、明石から戻り、権勢の座に復帰した後、自らの力で建設した邸宅である。光源氏は、ここに花散里をはじめ、末摘花、空蟬を住まわせ、あるいは明石の御方、筑紫の五節をも迎えようと考えた。いわば、ゆかりの女性たちを集めた邸宅だが、中でも桐壺帝の夫人のひとりであった麗景殿の女御の妹にあたる、花散里にこの邸宅を預けている。

二条東院については、「二条の院の、東なる宮、院の御処分なりしを、二なく、改め作らせ給ふ」（澪標）とあり、二条院の東方にあった父の院の遺産の御殿を、光源氏がこの上なく立派に改築させたものであった。また「松風」巻の冒頭には、「西の対、渡殿などかけて、まどころ家司など、あるべきさまにし置かせ給ふ。ひんがしの対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く作らせ給ひて…」とある。対（対屋）とは、前述したように貴族の夫人や家族の住居棟であり、東・西・北と整っていることから、二条東院もやはり本格的な寝殿造りの邸宅であった。

◎光源氏の六条院をめぐって

八月にぞ、六条の院造りはてて渡り給ふ。末中の町は、中宮の御ふる宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住み給ふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせ給へり（乙女）

六条院は、光源氏が太政大臣という最高位に昇りつめ、その子夕霧も元服し、一族隆盛の極みにあった時期に新築した邸宅である。「乙女」巻にみられるように、あちらこちらに散らばっているゆかりの女性たちを、ひとところに集めて住まわせようとした。その点だけをみると、二条東院の延長にあるともいえるが、光源氏は六条院においてさらに理想の邸宅を追求している。

まず、同じ「乙女」巻に、その敷地の規模は「四町」とある。当時、平安京の内で公卿に与えられる標準的な敷地は、一町（約一二〇メートル四方）と決められていた。したがって光源氏の六条院は、その四倍もあったことになる。その一事だけでも、光源氏の権勢の大きさを想像できる。

しかも光源氏は、そこを春夏秋冬の四つの町に分け、それぞれに季節に合った趣ある御殿と庭を造らせた。そして東南の町（春）は紫の上、東北の町（夏）は花散里、西南の町（秋）は秋好中宮、西北の町（冬）は明石の御方と、それぞれゆかりの女性たちの住まいとしたのである。さらに、明石の姫君、女三の宮、玉鬘なども、この六条院に住むことになる。

紫式部は、この六条院が完成した後の一年の移ろいを、「乙女」、「初音」、「胡蝶」、「蛍」、「常夏」、「篝火」、「野分」と七巻を費やし、紅葉鮮やかな秋、鶯の鳴く新春、宴の春、蛍舞う初夏、釣殿に涼む夏、篝火の影涼しい初秋、そして野分（台風）と、季節感豊かに描き出している。それはそのまま、光源氏の輝く日々を寿ぐものでもあった。

その中で光源氏自身は、紫の上とともに東南の町に住み、公私にわたり六条院を本拠とした。桐壺帝の皇子とはいえ、光源氏は源氏姓を賜って臣籍に降下した身分の者に過ぎない。その邸宅を「院」と呼ぶのは、冷泉帝の秋好中宮（皇后）の邸宅がふくまれていることによる。しかし、光源氏はのちに准太上天皇となり、邸宅は名実ともに六条院と称せられることになる。玉上氏は、この六条院について、「光源氏は自らの内裏を造ろうとした」と解釈されている。まさに権勢の極みにあった者の理想的な住まい

三、光源氏の邸宅・六条院の復元

◎その立地と規模

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見所ありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも、つどへ住ませむの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御ふるき宮のほとりを四町を占めて、造らせ給ふ（乙女）

光源氏の六条院は、「乙女」巻にみられるように、六条京極付近に造営された。そこにはもともと秋好中宮の母、六条御息所の邸宅があり、その邸宅をふくめて大掛かりな造成が行なわれた。

では六条院は、どのあたりにあったのだろうか。平安京の都市計画にしたがえば、南北を六条大路と六条坊門小路に、そして東西を京極大路と万里小路とに囲まれた一郭と推定した。現在の京都で分かりやすくいえば、鴨川に近い六条通りの北側、河原町五条の交差点をふくんだ一帯に相当する。

紫式部はなぜ、この地を選んだのだろうか。そこはかつての左大臣、源融の邸宅があった場所である。源融は、紫式部より約一世紀前の人で、嵯峨天皇の皇子として生まれ（母は更衣の身分）、源氏姓を賜り、のちに左大臣の位まで昇った。そうした経歴が光源氏と似ていることから、早くから光源氏のモデルのひとりとして指摘されている。

源融は、左大臣の位にあること二十四年、その間、六条京極の付近に河原院という壮大な邸宅を営み、河原の大臣とも呼ばれた。河原院では東北の塩釜の浦を模した庭を造らせ、海水を汲んできて塩を焼かせたことでも有名である。『伊勢物語』は、「むかし、左の大臣いまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろくつくりて住み給ひけり」と、伝えている。

源融河原院跡（写真：中川道夫）

源融の亡き後、河原院は宇多天皇に献上された。平安末期の『今昔物語集』（巻第二十七　本朝、附霊鬼）には、宇多天皇がかつての河原院に行かれた折、源融の亡霊が現われた話が伝えられている。紫式部の時代、源融の亡霊譚は半ば伝説として流布していたであろう。紫式部は、その伝説をふまえて、六条御息所の怨霊話（夕顔が物の怪におそわれた話）を創ったことは十分に考えられる。

一方、都市の発展史から平安京をみると、右京は湿地が多かったため、左京が早くから開けた。中でも貴族の大邸宅の多くは、内裏にも近い三条以北に集まっていた。その次が六条界隈といわれ、平安後期には白河院の六条内裏が営まれた例もある。源融のような有力な貴族の邸宅が早くからあったこととも、あるいは関係があるかもしれない。

とくに六条京極あたりは鴨川の清流に臨み、東山を間近にした風光明媚な地であり、また水も豊富に湧き出たことが考えられる。それだけに河原院のような、そして光源氏の六条院のごとき、趣味性の高い邸宅にはふさわしい土地柄といえるだろう。

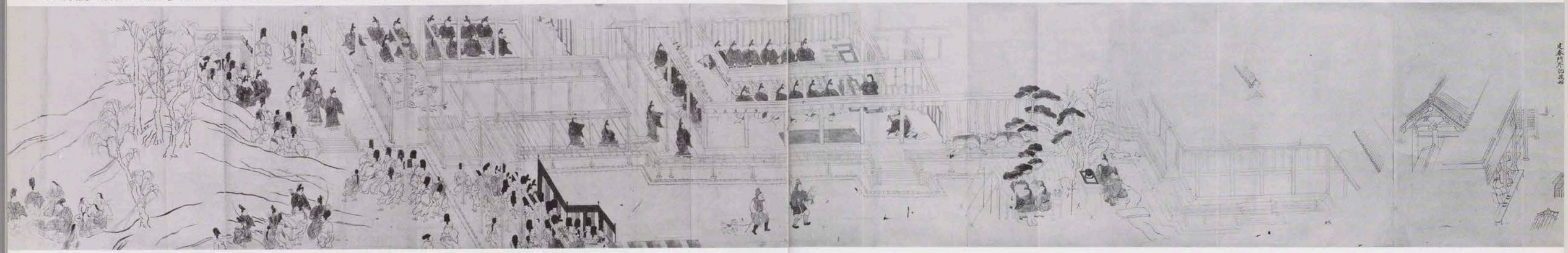
また河原院の敷地は、四町の広さがあったと伝えられている。光源氏の六条院が四町あったことはすでに述べたが、これと一致する。現在の坪数でいえば、約一万九二〇〇坪にも及ぶ広大な敷地である。

六条京極への立地といい、その規模といい、光源氏の権勢が伝説の左大臣、源融を思わせるものであったと、紫式部はほのめかしているのであろう。

六条院全体配置図

六条坊門小路
西北の町
東北の町
御蔵町
泉
北対
遣水
馬場殿
西対
東対
寝殿
中門
侍所・車寄
馬場
中の廊
中島
池
東釣殿
厩
対
対
中の廊
中の廊
楊梅小路
楊梅小路
北対
北対
西二対
西一対
西一対
京極大路
万里小路
泉
西対
東対
東対
侍所
寝殿
寝殿
侍所
中門
中門
中門
中門
車寄
車寄
中の廊
西釣殿
東釣殿
西釣殿
東釣殿
中島
中島
池
池
築山
築山
築山
西南の町
東南の町
N
0
25
50M
六条大路

年中行事絵巻「別本第二 外記政始」／個人蔵（写真：中央公論社版『日本の絵巻　第8巻　年中行事絵巻』より）



反り橋（渡殿部分）

◎六条院の全体配置

〈敷地割り〉

馬場の大殿は、こなたの廊より見通す、程遠からず。「若き人々。渡殿の戸あけて物見よや。左のつかさにいと由ある官人多かる頃なり。せうせうの殿上人に劣るまじ」（螢）

光源氏は、六条院の四町の敷地を四つに分け、それぞれに独立した豪壮な邸宅を営み、ゆかりの女性たちの住まいとした。当時、実在した院や邸宅の中でも、とくに広大な敷地をもつものとして朱雀院（八町）や冷泉院（四町）などがあったが、これらはいずれも敷地全体を一つとして使用している。あえて六条院との類似を探せば、『宇津保物語』にある藤原正頼の三条大宮邸（元后の宮邸）が、四町を四つに分け、そのうちの一つに桧皮葺きばかりの立派な御殿を建てたと記されている。

しかし、『源氏物語』では、四つの町のそれぞれに寝殿造りや、それに準じる御殿を建て、しかも春・夏・秋・冬と四季の風情を込めた町としている。これは『源氏物語』の独創といえるだろう。季節感や季節の行事を非常に重視して書き進めている紫式部の手法が、建築的発想にも及んでいるかのようである。

では、六条院は具体的には、どのように四つの町に分けられているのだろうか。

敷地の四町の中には、本来、平安京の都市計画の上では道路であった部分（当時の富小路と楊梅小路）も取り込まれている。したがって実際には四町より幾分広く、約二五二メートル四方の敷地であったといえる。この敷地を四つに分ける際、今回の復元では、敷地内を南北に通る富小路は、東側の町（東南、東北の町）が取り込んだものとした。これによって、

簀子縁、庇の間、母屋（寝殿中央部）

敷地の東端にあったとされる馬場、及び馬場殿の用地を確保した。

馬場と馬場殿については、「乙女」巻に「東面は、分けて馬場の殿つくり」とあり、また「螢」巻には「馬場の大殿は、こなたの廊より見通す、程遠からず」「（馬場は）南の町もとほして、遙々とあれば」とある。

「螢」巻では、五月五日の節句に六条院の馬場で競射が行なわれ、中将が左近衛府の友達を誘ってやって来ることになった。そこで光源氏は「若き人々（若い女房たち）に呼び掛け、渡殿で見物させるという計らいをしたのである。この場面から、東北の町には競馬見物のための馬場殿があること、馬場は東北の町から東南の町へ二町かけてつくられていたことが分かる。

また敷地を東西に横切る楊梅小路の西半分は、明石の御方の西北の町が取り込んだと判断した。西北の町には、北側に蔵町の一区画があった（乙女）からである。したがって残る秋好中宮の里邸である西南の町は、道路部分をまったくふくまず、本来の一町の広さとした。（配置図参照）

〈各町の結び付き〉

「中の廊」について

六条院の四つの町は、それぞれが完全に独立して機能していたわけではない。「乙女」巻の右の記述にみられるように、ある部分は塀で隔て、また各建物は長い渡り廊下で結ばれていた。これによって六条院の各町の調和が保たれていたのである。

この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行きかよはして、け近く、をかしきあはひにしなし給へり（乙女）

光源氏が、東南の町からほかの町の御殿を訪ねる

東南の町（行幸啓の図「藤裏葉」）

画・穂積和夫

時には、「中の廊」と呼ばれる廊下を渡って歩いた。「野分」巻に、光源氏が台風の見舞いに各町の女性たちを訪ね歩く場面がある。その順序は、紫の上（東南の町）～秋好中宮（西南の町）～明石の御方（西北の町）～玉鬘（東北の町、西対）～花散里（東北の町、東対）～明石の姫君（東南の町）となっている。

秋好中宮のもとから明石の御方へと向かう場面では、「こなたよりやがて北に通りて、明石の御方を見やり給へば」（野分）とあることから、西南の町から西北の町へと直接行けるようになっていたと思われる。光源氏が各町を廻り歩く場面は、もうひとつ「初音」巻にもみられるが、こうした訪問を可能にする中の廊のつながりを考えると、各御殿の結び付きは配置図に示したようになる。

中の廊については、今回、最後まで議論の対象となった箇所があった。それは「藤裏葉」巻で、紅葉の美しい季節に冷泉帝と朱雀院が六条院に行幸啓される、『源氏物語』の中でもとりわけ雅趣豊かな場面である。帝と院は、東北の町から中の廊を通って東南の町へと移る。その途中、「山の紅葉いづかたも劣らねど、西の御前（西南の町）は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせ給ふ」とある。中の廊は、外側が壁になっていたと思われる。そこで東北の町と東南の町を結ぶ中の廊の壁を崩し、さらに西南の町の中門を開いて、六条院の中でもとくに見事な庭の紅葉をお見せしたのである。

そのこと自体は、不可能ではない。しかし、中の廊から西南の町の中門までは、復元してみるとかなりの距離がある。紅葉は見えたとしても、ほんのわずかである。紫式部は、それを承知の上で、こういう描写をしたのだろうか。

これをめぐって、壁を崩した中の廊や、中門の位置について幾度も検討し直した。その結果、中門のわずかな隙間から、盛りの紅葉を見せることこそ、光源氏の、そして紫式部の独自の美学であったに違いないとの結論に達した。したがって東北の町と東南の町を結ぶ中の廊と、西南の町の中門は、図のような位置に想定した（この時はまだ東南の町の西二の対はなかった）。

各町の関係

各町は、こうした渡り廊下によって結ばれていたわけだが、とくに関係が深いのは、東南の町と東北の町である。六条院の中心が光源氏の住む東南の町であることはいうまでもないが、東北の町には、それを補助する役割があったと考えられる。「玉鬘」の巻で、夕顔の忘れ形見、玉鬘を東北の町に住まわせる時、西の対が文殿であったのを別の場所に移したとある。この文殿は、六条院全体の施設であり、それが東北の町につくられていた。

また、すでに述べた冷泉帝と朱雀院の六条院行幸啓の折、二人はいったん東北の町の御殿に入られて準備を整えてから、「南（東南の町）の寝殿に移りお

はします」とある。これらから分かることは、東南の町と東北の町における、ハレとケの関係である。つまり東南の町は表向き、東北の町は内向き（家政・事務所）の役割をもち、相互的に機能していたのである。

こうした視点をふまえて、今回の復元では、東南の町と東北の町との間には大袈裟な塀は設けず、築山や樹木だけの隔てとした。また両町の雑舎群の大半を一つにまとめ、東北の町の北側にあったものと推定した。

これに対し、西北の町と西南の町は比較的独立して機能しているが、それでも完全にそうなっているわけではない。たとえば、明石の御方の住まいである西北の町は、「西の町は、北面築き分けて、み蔵町なり」（乙女）とあるように、北側が蔵町となっていたが、これは機能的には六条院全体の倉庫群といえる。

また、秋好中宮の里邸である西南の町は、紫の上の東南の町と池がつながっていた。「胡蝶」巻は、春の宴の華やかな描写で始まるが、その折、秋好中宮の若い女房たちが着飾って船に乗り、紫の上の御殿の池へ訪ねて来る場面がある。

「南の池の、こなたにとはし通はしなさせ給へるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山のさきよりこぎまひて、東の釣殿に、こなたの若き人々集めさせ給ふ」。唐風に装った龍頭鷁首の華やかな船を池に浮かべ、かじ取りの童子にも唐風の格好をさせ、「まことの知らぬ国に来たらむここちして、あはれに面白く」春の宴は繰り広げられた。『源氏物語』の中でも、とりわけ美しい場面である。その演出を可能にしたのが、二つの池のつながりであった。二つの池の間には、隔ての山があって普段は見えないようになっているが、山の向こう側は水路で結ばれていたのである。

塀と廊、そして隔ての山と池の水…「切れているようで、つながっている」、こうした断続の微妙なバランスは、六条院の大きな建築的特徴といえる。と同時に、当時の貴族社会の美意識の一端にも触れるようで興味深いものがある。この感性は、六条院全体の構成の隅々にまで及んでいたであろう。

◎各町の建物について

〈東南（春）の町〉

春のおとどのお前、とり分きて、梅の香も御簾のうちのにほひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ（初音）

光源氏と紫の上の住む東南の町は、春の町であった。「乙女」巻に「南の東は山高く、春の花の木、数をつくして植ゑ、池のさま面白くすぐれて、お前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩つつじなどやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり」とあるように、春を愛でる庭が造られていた。

その御殿は六条院の中心であり、重要な行事の大半はここで行なわれた。冷泉帝と朱雀院の六条院行幸啓の際、晴れの舞台となったのも東南の町の寝殿である。こうした重要な行事の場であり、また権勢並ぶものなき光源氏の住まいでもあることから、東南の町の御殿はきわめて壮麗な寝殿造りであったことは容易に想像がつく。

『源氏物語』の記述を具体的にみていくと、「初音」巻で男踏歌（正月十四日、四位以下の人々が催馬楽を歌いながら、終夜貴紳の家を回りあるく行事）が六条院にやって来る場面で、「左右の対、渡殿などに、御局しつつおはす」とあり、見物のための席を左右の対にも設けたとされている。これによって東南の町には寝殿を中心に、東と西の対屋が整っていたことが分かる。

寝殿造りというと、一般に東西の対屋が揃っているのが当然と思われがちだが、実在した邸宅はかならずしもそうではない。『年中行事絵巻』にみられる藤原道長の東三条殿は東対のみであり、『小右記』の作者として知られる右大臣藤原実資の小野宮には、東対がなかったといわれている。歴史的にみると、初期には揃っていた東西の対屋が、次第に簡略化されたとする説もある。しかし、光源氏の理想的な邸宅である六条院では、当然、東西の対が揃っているべきだと、紫式部は考えたのであろう。

東西の対屋のうち、東の対は玄関（中門）に近く、接客空間としての役割が高いことを考慮し、東側に柱間一間延ばし、孫庇をもつ形態とした。これは、藤原道長の土御門殿、東三条殿の例にならったものでもある。

また西の対は、「若菜・上」巻において、朱雀院の姫君、女三の宮が六条院に降嫁された折、「若菜参りし西の放出でに、御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせ給へり」とあり、対屋が二つあった。このうち西二対については、「若菜」巻までまったく記述がないので、六条院造営当時にはなかったものを、女三の宮のために増築したと考えるほうが自然である。そこで東南の町の御殿は、まず寝殿を中心に東西の対をもつ寝殿造りの標準形を配し、のちに土地に余裕のある西対の後方（北側）に、西二対を増築した形とした。

北の対については、記述はない。しかし、光源氏の二条東院にはあったことから、六条院にも北の対はあったものと想定した（後述するように、西南の町、東北の町にも北の対を置いた）。

東西の対屋から伸びた中門廊の南端には、それぞれ釣殿があったはずである。釣殿は、池の中、あるいは池畔にあり、夏に涼をとったり、小さな宴を催す場である。「胡蝶」巻にみられる春の宴の際に、秋好中宮の女房たちが船に乗ってやって来たのが、東の釣殿であった。

西の釣殿については、かなり後の話になるが、「蜻蛉」巻で光源氏の子（実は柏木と女三の宮との子）薫の大将が、六条院の釣殿で休んだ後、西の渡殿にいた女一の宮をかいま見る場面がある。この時の釣殿は、文脈からいって西の釣殿であったといえる。これも後の増築とも考えられるが、『源氏物語』には、西の釣殿の増築、あるいはその契機となりうる話は見当たらない。ここでは東南の町が六条院の中心であることからも、当初からあったものと想定した。また、光源氏の身分の高さからみて、中門近くには侍所、車寄などがあったと推定した。護衛の武士たちが詰める侍所は、各町にそれぞれあったであろう。

ところで今回、懸案となったひとつに、塗籠があった。塗籠は、母屋の一隅を壁で塗り込め、納戸あるいは寝室として使用する部屋である。寝殿造りの母屋にはかならずあったものとされてきたが、『源氏物語』の六条院に関する記述の中には、実は一度も登場しない。

「源氏物語絵巻・鈴虫」一（部分）／五島美術館蔵

二条院では、「南東の戸をあけておはします。寝殿の西の塗籠なりけり」（御法）とあり、また一条御息所の住む小野の山荘では「中の塗籠の戸あけあはせて渡り給へる」（夕霧）、女二の宮の居る一条宮でも「人かよはし給ふ塗籠の北の口より、入れ奉りてけり」（夕霧）とあり、その存在は疑いもない。ところが六条院に関しては、どの町についてもまったく塗籠の記述がない。

そこで実在した建物に塗籠のない例を探してみると、現在の紫宸殿には塗籠がない。太田静六博士が研究された堀河殿の寝殿にもみられないが、これは当初から里内裏を目的として建てられたからであろう。また、『類聚雑要抄』巻第二の寝殿指図をみると、そこにも塗籠が描かれていない例もある。

塗籠が、歴史的にいつ頃からあったかは不明だが、寝殿造りに不可欠のものとはいえないことになる。さらに紫式部の記述を検討すると、東南の町の寝殿の場合、当初は紫の上と明石の姫君が、そして後半には女三の宮と明石の姫君が同居していたので、塗籠をつくるだけのスペースの余裕がないのである。これらをふまえて、六条院には塗籠がなかったものとして復元した。

一方、寝殿造りは庭に関してもまだ不明の部分が多くある。池の形態にしても、大陸、半島の影響を受けた四角形のものではなかったか、とする説もある。しかし『源氏物語』には記述がなく、光源氏の時代にはたしてどのような形であったかは断定できないが、ここでは絵巻などにみられる従来のイメージを活かすようにした。

また、池に注ぐ遣水については、「若菜・上」巻に「寝殿の東面（中略）、やり水などのゆきあひはれて」とあり、さらに「梅枝」巻に「西の渡殿の下より出づる、みぎは近う埋ませ給へるを」とある。『源氏物語絵巻・鈴虫』第一段にも、出家した女三の宮が住む寝殿の西面の渡殿近くを、石組の遣水が流れている絵が描かれている。これらのことから、東南の町には東西両方の渡殿の下を遣水が流れ、それぞれが池に注いでいるものとした。なお、近年発掘調査、復元された平泉の毛越寺は、平安時代の貴重な浄土庭園を有しており、この庭園の遣水を参考とした。

〈東北（夏）の町〉

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深く面白く、山里めきて…（乙女）

東北の町は、花散里の預かる夏の町である。花散里は、第一級の寝殿造りである二条東院を預かっていただけに、六条院のこの町の御殿も、それなりの規模を備えていたであろう。

「篝火」巻に「東の対の方に、面白き笛の音、箏に吹きあはせたり」とあり、また「玉鬘」巻に「丑寅の町の西の対、文殿にてあるを」とあり、東西の対屋が整っていたことが分かる。また、北の対については、東南の町と同様にあったものとした。

東の対からは中門廊が伸び、その南端に東の釣殿があった。「常夏」巻は、「いとあつき日、東の釣殿に出で給ひて涼み給ふ」という夏の日の描写で始まるが、光源氏はこの後、西の対の玉鬘を訪ねていることから、文中の東の釣殿は東北の町の建物であったと考えられる。東北の町に池があったことは、「藤裏葉」の六条院行幸啓の折、光源氏の演出で帝と院にそれとなく鵜飼をおみせした場面から知ることができるが、東の釣殿はその池に設けられていた。

またすでに述べたように、東北の町には馬場殿があり、東端には東南の町まで通して馬場があった。さらに敷地の北側には、東南の町と東北の町を兼ねた雑舎群を配置したことは、前述のとおりである。

〈西南（秋）の町〉

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色こかるべき植ゑ木どもを植ゑて、泉の水遠くすまし、やり水の音まさるべき巌たて加へ、滝おとして、秋の野を遙かに作りたる、その頃にあひて、盛に咲き乱れたり（乙女）

西南の町は、秋好中宮の好きな秋を楽しむための庭をもつ御殿である。「藤裏葉」の行幸啓の折、冷泉帝と朱雀院のためにわざわざ中の廊の壁を崩し、中門を開いて、西南の町の築山の紅葉をみせる演出をしたことはすでに述べたが、西南の町の秋の風情は、それほど見事を尽くしていたのである。

建物に関する記述を追うと、「若菜・上」巻に寝殿が、また「野分」巻に東の対の描写がみられる。しかし、西南の町についてはそうしたディテールの読み取りよりも、まず秋好中宮の身分が重要となる。冷泉帝の皇后である秋好中宮は、臣籍に下った光源氏よりも身分が高い。六条院の主人は光源氏だが、この身分差を考えると、西南の町の御殿は、東南の町よりも格が上である。このことから今回は、東南の町と西南の町の御殿の規模は、基本的にはほぼ同格と考えた。

玉上氏は、秋好中宮の身分などをふまえて、この西南の町を六条院における寝殿造りの基本形としたいとされている。そこで敷地は一町ちょうどとし、建物については格式を重んじ、寝殿を中心に東西及び北の対をもち、やはり東西の釣殿を整えた、秋好中宮の身分にふさわしい規模の寝殿造りを再現した。

また西南の町の庭には、滝があったという。これは「乙女」巻に「泉の水遠くすまし、やり水の音まさるべき巌たて加へ、滝おとして」とあることから、泉の水を遠くまでひき、その先にあったと解釈できる。したがって建物から遠く、池に近い位置と考えた。

〈西北（冬）の町〉

西の町は、北面築き分けて、み蔵町なり。へだての垣に松の木しげく、雪をもてあそばむたよりによせたり（乙女）

冬の雪や、朝霜むすぶ景色を楽しむ西北の町は、明石の御方の住まいである。光源氏が須磨、明石に流されていた折の女性である明石の御方は、その父、明石入道の経済力を背景として大堰の里に自分の居を構えていたが、六条院の造営に伴って西北の町に移ってきた。

しかし、その建物はいわゆる冒頭に挙げたような寝殿造りではない。「若菜・上」巻に、懐妊した明石の姫君が、出産のために母親（明石の御方）のいる西北の町へと移る場面がある。「かの明石の御町の中の対に渡し奉り給ふ。こなたはただおほきなる対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに…」とあり、ここの御殿は寝殿がなく、大きな対屋が二つだけ並び、渡り廊下がめぐらされていた。これは明石の御方の身分が、ほかの町の夫人たちよりも低いためだが、紫式部は『源氏物語』において、こうした身分の違いをはっきりと建築面にも描いていることがよく分かる。

また、西北の町には、北側を区切り倉庫群の立ち並ぶ一郭があったことは、前述したとおりである。

四、東南の町における「寝殿造り」の構造

六条院の寝殿造りは、どのような建築だったのだろうか。主として東南の町の建物を検討し、次のように想定するとともに、図面による復元を試みた。

①平面規模

ⓐ主要建造物

・寝殿　七間四面（母屋七間、四周に庇がつく）＋北孫庇

・対屋（東西）五間四面＋広庇

・渡殿（北側）母屋＋北庇

（南側）透渡殿（単廊）

澤田名垂の『家屋雑考』には「寝殿の造り方は、大抵七間四面を常法とす。或は五間、或は十二間などもなきにあらず」とあり、七間四面を標準としていた。実在した上級貴族の邸宅の研究や、京都御所の紫宸殿（江戸期）との比較からいっても、光源氏の寝殿としては七間四面が妥当と考えた。

七間四面とは、正面七間の母屋を中心に、その四周に庇の間がつく規模である。さらにその周囲には、高欄をめぐらせた五尺幅の簀子縁がついている。

対屋は、五間四面に広庇をもつ規模としたが、東南の町の東の対に東孫庇のつくことは、すでに述べた通りである。

渡殿のうち、北側は女房たちの局を設けられる母屋のある形式とした。また、南側の渡殿はいわゆる渡り廊下の形式で、西対寄りは反り橋とした。これは「乙女」巻に、秋好中宮のお使いの童が、「廊、渡殿の反り橋を」渡って、紫の上のいる寝殿にやって来たとの記述からである。

こうした渡殿の反り橋は、『年中行事絵巻』にもみることができる。

ⓑ柱間（柱と柱の間隔）

・寝殿　母屋二・七メートル　庇三・六メートル

・対屋　母屋二・四メートル　庇三・〇メートル

・その他　二・四メートル

・おおきなる対（西北の町）　三・〇メートル

寝殿造りの邸宅には、柱間の寸法に一定の基準がなかった。そのため、建物によって少しずつ大きさが異なっていたと思われる。母屋と庇の間でも、一間の幅に違いがある場合もよくある。それだけに柱間寸法を決めるのは、きわめて困難な作業である。

今回は、平安京のわずかな邸宅遺構である右京一条三坊九町（平城京の貴族の住宅様式の延長にあるとされる住宅）、及び右京六条一坊五町（九世紀中頃の邸宅、現・京都リサーチパーク）などの発掘調査報告の資料を基に、各寸法を推定した（二四ページ参照）。

また西北の町の「おほきなる対」については、御所の紫宸殿の柱間が桁行十尺（約三メートル）であることから、それを超えない程度を想定した。

「源氏物語絵巻・柏木」三（部分）／徳川黎明会蔵

②立面規模

ⓐ床

・総板敷

・床のレベル　母屋と庇の間は同レベル

簀子縁は庇の間より一段低い

孫庇は庇の間より一段低い

今回、非常に興味深かったのは、六条院・東南の町の寝殿における、床のレベルである。有職故実では、母屋は庇の間より一段高いものとされてきた。澤田名垂の『家屋雑考』でも、「母屋は廂より少し高し」としている。

ところが『源氏物語絵巻・柏木』第三段に描かれた柱と床、畳との関係を詳細にみていくと、意外にも母屋と庇の間の床が同レベルなのである。この場面は、光源氏が五十の祝（誕生後五十日めの祝い）を迎えた薫を抱く有名なものだが、場所は東南の町の寝殿で、母屋、庇、簀子縁と連続した空間がみられる。その絵の中には、母屋と庇の間との床の段差が描かれていない。

その直前の「柏木」第二段には、病に伏す柏木があきらかに一段高い母屋に臥せっているので、柏木の邸宅では母屋と庇の間の床に段差があったことになる。反対に「鈴虫」第二段で、光源氏や夕霧が冷泉院を訪れて月見の宴を開く場面をみると、母屋と庇の間の床は同レベルとなっている。つまり、『源氏物語絵巻』の絵師は、はっきりとその違いを描き分けているのである。

絵巻のほかに、実在の建物などを検討していくと、御所の紫宸殿や清涼殿もやはり母屋から庇の間へと続く床が同レベルであった。現在の紫宸殿と清涼殿は、有職故実に精通した公家の裏松固禅が著わした『大内裏図考証』に基づいて、江戸時代に再建された建築である。光源氏の時代とは相当の開きはあるが、江戸期に内裏の復元を指導した人たちは、母屋と庇の間の床が同レベルだと考えていたことになる（建築史の面からは、母屋と庇の間の床を同レベルとする説もあるが、『源氏物語絵巻』を見るかぎり、床のレベルには段差がある場合とない場合とがあったことになる）。

いずれにせよ一〇〇〇年を経た『源氏物語絵巻』の中に、有職故実の常識を覆す可能性を発見したことは一つの驚きであった。そこで今回の六条院の復元では、『源氏物語絵巻』の表現にしたがい、母屋と庇の間の床については同レベルと想定した。

また北の対は、建物の床が土間形式であった可能性もある。光源氏の六条院の時代がどうであったかは不明だが、一方、里内裏として使われた堀河殿の北の対について、女房曹司（女房たちの部屋）にあてたとする文献もあることから、ここでは北の対もほかと同様に板敷を採用した。

ⓑ軒高、床高

・軒高　寝殿　約四・六三メートル

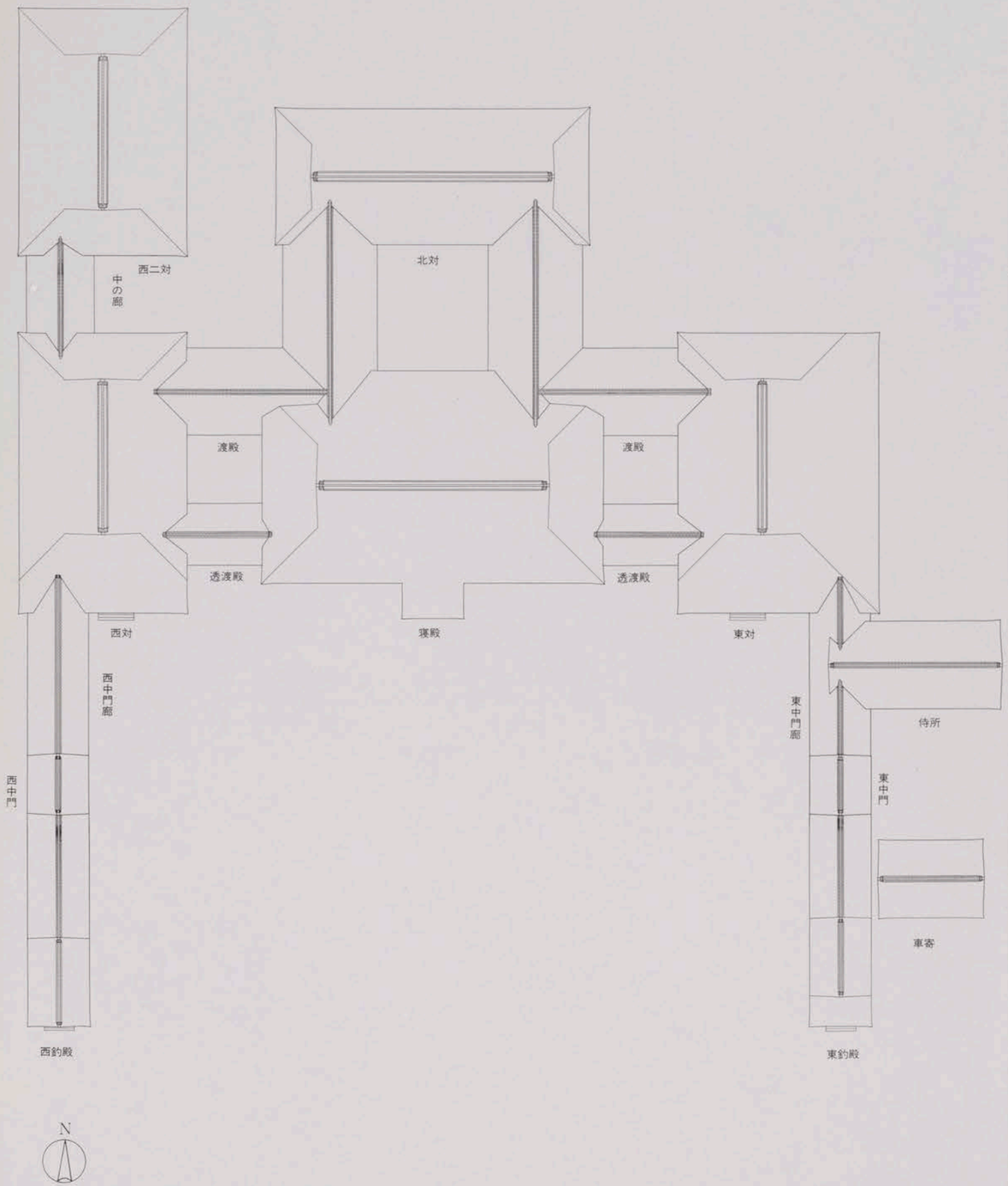
・床高　寝殿　約一・二メートル

寝殿造りの殿舎は、一般に軒高があまり高くなく、屋根勾配も緩やかであったとされている。法隆寺の聖徳太子絵伝（十一世紀半ば）に残る平安期の建物をみても、そうした印象を受ける（二四ページ参照）。

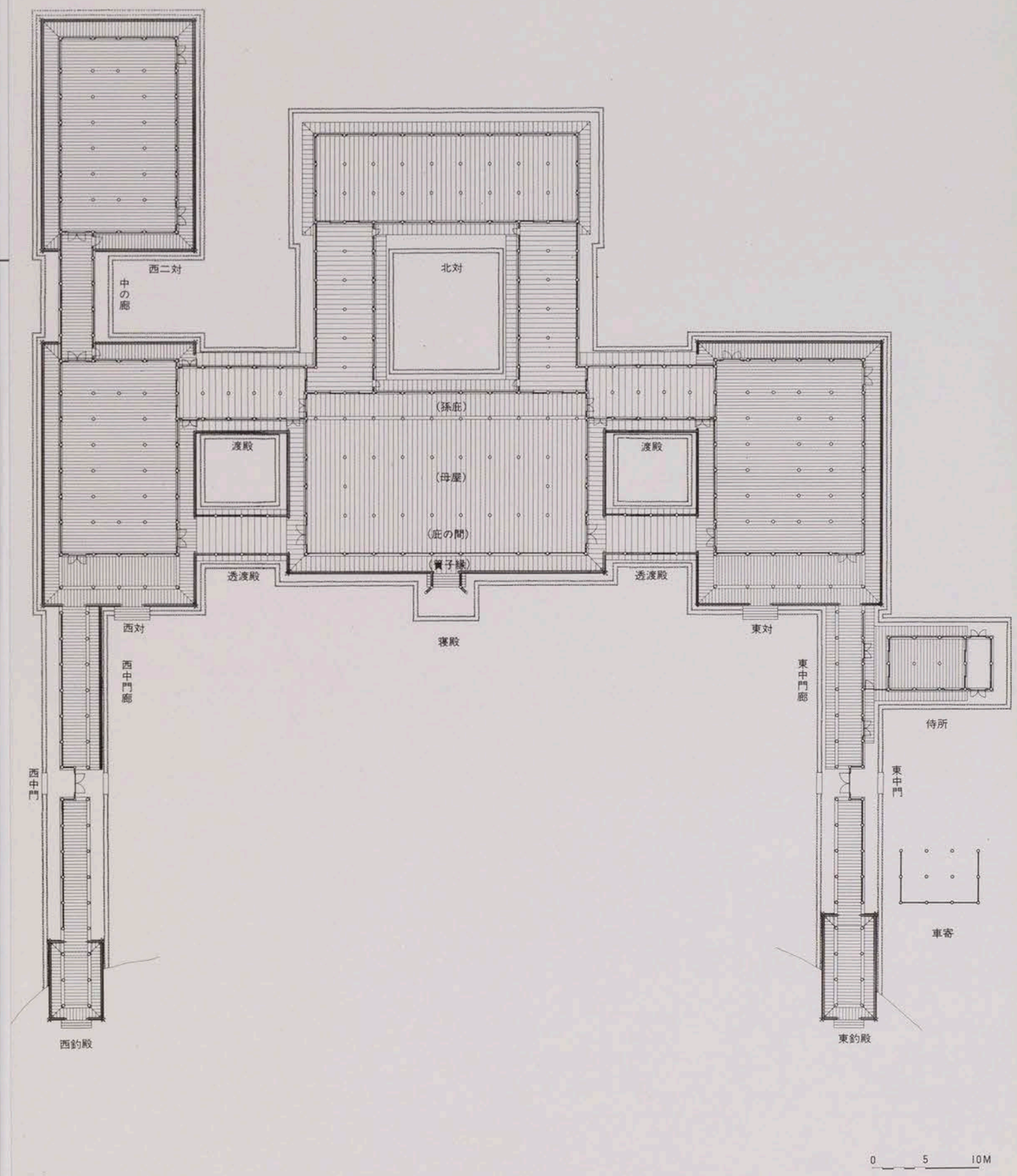
床高については、『家屋雑考』に「正面に階あり。五級階の左右にも欄あり」とあり、通常は寝殿の正面に五段の階段が付いていたとされており、これを推察の一つの手掛かりとした。

貴族の邸宅は、奈良期には大陸風の椅子とベッドの生活も行なわれていたが、平安期になると座る様式へと変化し、それに伴って軒高が低く、屋根勾配も緩やかになってきたとする建築史の見方もある。しかし、寝殿造りの軒高、床高などについては、正確な規範となりうる資料がまだ発見されていない。

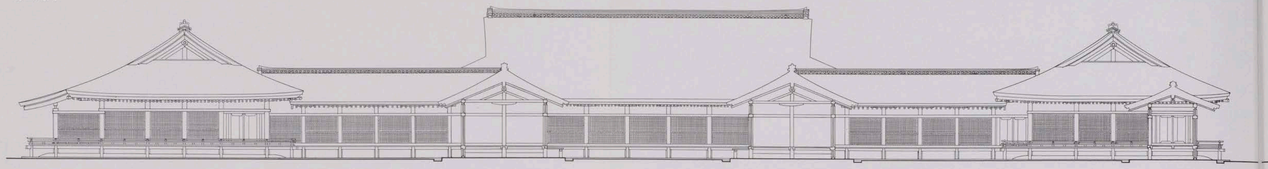
屋根伏図（東南の町）



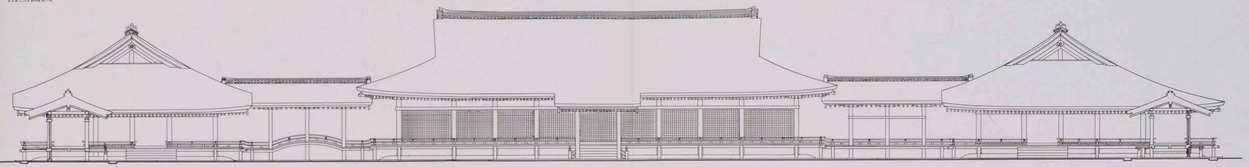
平面図（東南の町）



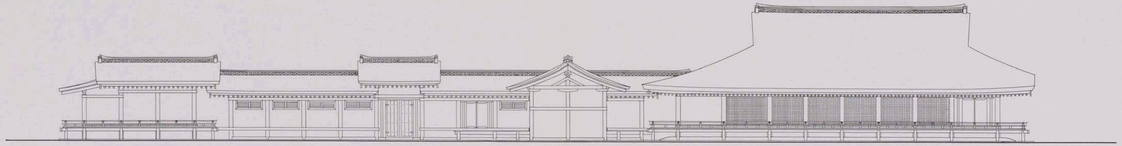
北立面図



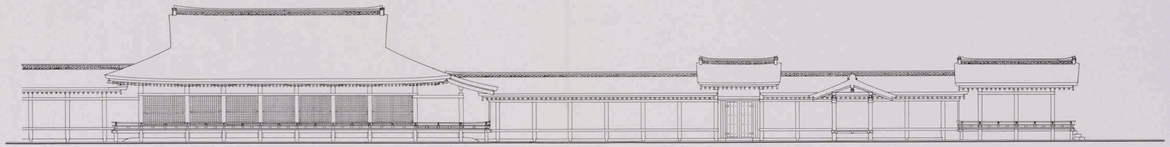
南立面図



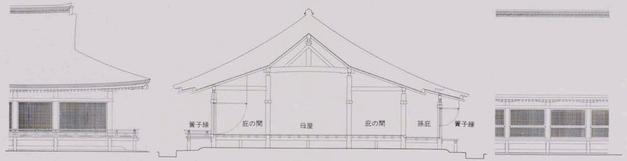
東立面図



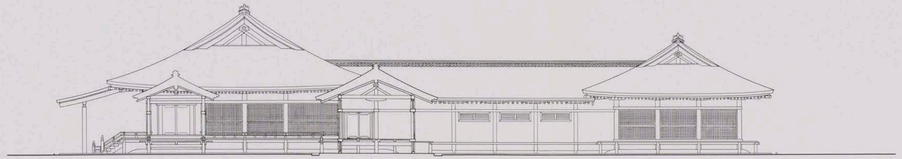
西立面図



寝殿矩計図



東立面図



ここでは文献、絵巻物のほか、法隆寺聖徳太子絵伝、平安期の面影を残すと伝えられる宇治上神社拝殿、春日大社着到殿などを参考にしつつ、建築的にみて安定感のある全体のプロポーションを想定した。

③材質と仕様

ⓐ**柱**

・材質　桧（雑舎は杉）

・寸法　直径三〇センチメートル程度の丸柱

・様式　素木の掘立柱

右京六条一坊五町の発掘調査現場では、径一尺の桧の丸柱の柱根（掘立柱）が発見されている。また主要な建物には桧、そのほかは杉材を使用していたと推定されている。この発掘調査を担当された杉山信三氏（京都市埋蔵文化財研究所所長）からご助言を戴き、また絵巻関係を調査し、右記のように想定した。

ⓑ**屋根**

・寝殿　桧皮葺　入母屋造り

・対屋　桧皮葺　切妻造り、縋破風

・雑舎　板葺　切妻造り

屋根の部材については、『家屋雑考』その他の資料から、寝殿や対屋は桧皮葺とし、屋根頂部にノシ瓦を載せる形態とした。

桧皮葺とは、桧の樹皮を一尺五寸から二尺の長さに切ったものを、葺き足（重ね目）一寸五分ほどで重ね、竹針で留めながら下から葺く方法である。また、雑舎については、「蓬生」巻にみられる故常陸の宮邸が、「下の屋どものはかなき板ぶきなりしなどは」とあり、板葺であったことから、ここでも同様とした。

④その他

（構造部分）

寝殿造りの建物には、天井はなく、化粧屋根裏である。下から見上げると、屋根の垂木と野地板がそのまま見える構造であった。

小屋組は、梁の上に家扶首を組み、斗と舟肘木を載せ、棟を受ける構造とした。

建築史家・福山敏男氏の「寝殿造邸宅に関する造営文書」（『日本建築史研究・続編』）には、寝殿造りの建築の際の発注書と思われる貴重な文書がみられるが、同文書に梁、桁、宇立、家扶首、斗などの建築用語がすでにみられるほか、各部材の発注寸法を知ることができる。

（建具類について）

寝殿造りの建物では、建具類が重要な役目を果たした。それだけに、蔀戸、格子戸、舞良戸、障子など、さまざまな形態のものがみられる。なかでも特徴的な建具は、『源氏物語』の中で「格子」と呼ばれている蔀戸であろう。これは庇の間と簀子縁との境界に吊る戸で、たとえば「野分」巻で光源氏が「いとうたて、あわただしき風なめり。御格子おろしてよ」という場面がある。風が強くなり、御簾が捲れて中が見えてしまうので格子を降ろせと、命じているのである。

蔀戸は、四周に框を組んだ中に、前面に格子状の桟を組み、その裏に薄い横板を打ち付けた戸である。一枚格子（柱と柱の間に一枚の大きな蔀戸を入れたもの）の場合は内側に引き上げ、二枚格子の場合は上半分は外側に跳ね上げ、下半分はそのままにするか、取り外す。『源氏物語絵巻』では、御簾を外に掛けている例が多いので、その場合は一枚格子を内側に跳ね上げていると考えられる。今回の復元では、京都御所の紫宸殿、清涼殿、『紫式部日記絵詞』にみられる二枚格子などを参考として、寝殿と対屋の南庇は一枚格子、そのほかは二枚格子とした。

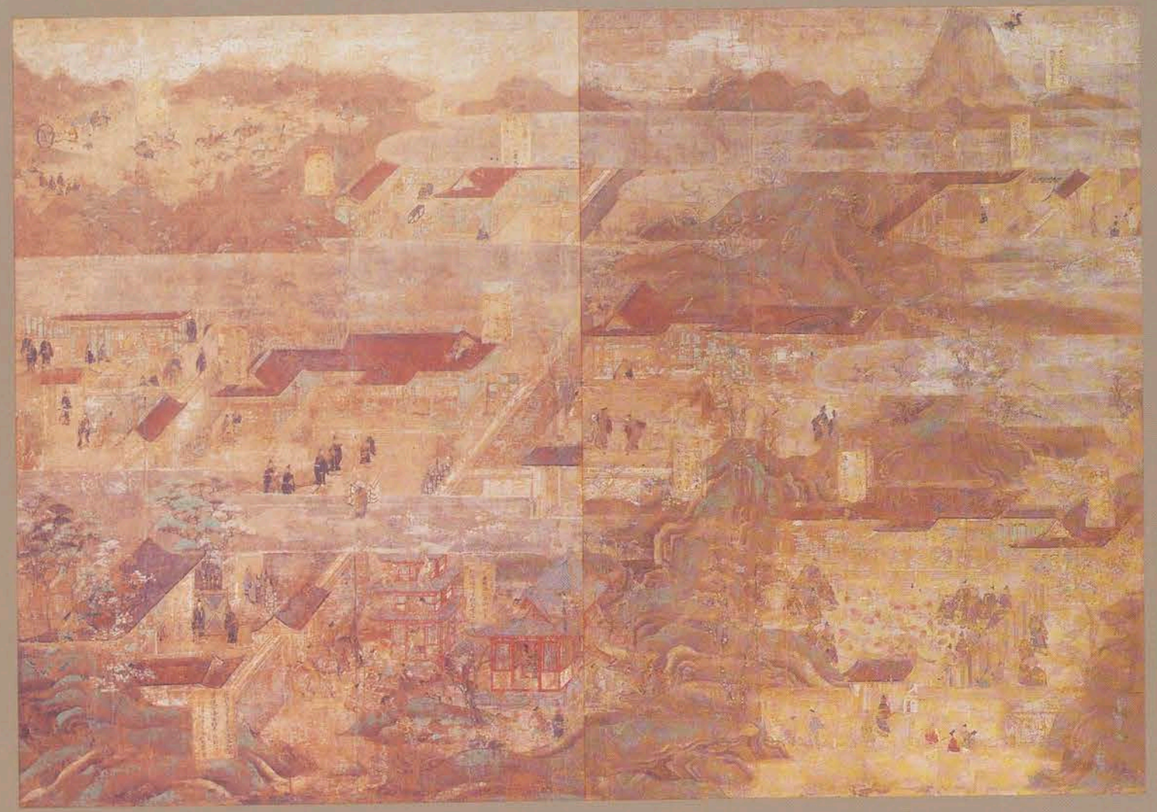
また庇の間の四隅には、両開きの妻戸を立てて、出入り口としていた。「幻」巻には、七夕の夜、「まだ夜深う、一所起き給ひて、妻戸押しあけ」、光源氏が亡き紫の上を偲ぶ場面がある。

妻戸（はしばみ戸）は、二枚の板を継ぎ合わせ、扉の上下に「端喰」という細長い横板を入れて固定したものである。『源氏物語絵巻』では「竹河」第一段に、うららかな春の日に玉鬘邸の妻戸が開け放たれた様子がみられるが、現存する最古のものでは宇治上神社本殿の扉が知られている。

五、六条院のモデルと工期

紫式部の描いた六条院は、きわめて具体的であり、細部にも意識が及んでいる。また、「小障子のかみより、妻戸のあきたる隙」をのぞいたといったように、経験した者、知った者でなければ書けないような微妙な描写もかなりみられる。そこで立地のモデルが源融の河原院であったと想像されるように、建物についてもやはり実在した邸宅のどれかをモデルにしたとの想像も成り立つ。モデルの可能性としては、内裏、一条院殿、東三条殿、土御門殿などを挙げることができる。

内裏については、紫式部は中宮彰子に仕えたものの、当時の内裏は火災で焼失していたので、実際には知らないのではないかとする説がある。しかし、かりにそうであっても、中宮に仕えていただけに、伝え聞いた内裏のイメージは相当はっきりと持っていたであろう。六条院における棟と棟を次々と廊で結ぶ構成は、ある意味で内裏を連想させるものがある。



法隆寺聖徳太子絵伝（第二隻）／東京国立博物館蔵

平安京右京六条一坊の邸宅跡（写真：京都リサーチパーク）

一条院殿、東三条殿、土御門殿は、いずれも中宮彰子について暮らした邸宅である。それらの中でも、紫式部がもっとも影響を受けたと思われる邸宅が、御堂関白藤原道長の土御門殿である。栄華を極めた道長の邸宅の様子は、『紫式部日記絵詞』などからうかがうことができるが、随所に建築的な工夫がなされていたであろう。六条院における西二対の増築や馬場（道長は競馬が大好きであった）の存在は、土御門殿との関連も考えられるが、断定はできない。

むしろ、紫式部はいくつかの経験した邸宅を基に、さらに理想の光源氏邸を頭の中に構築したのであろう。その構成力には、平安期の女性とは思えないスケールの大きさと緻密さを感じる。五十四帖にも及ぶ長編物語に数え切れないほどの場面をちりばめながら、六条院の記述に関して建築的な視点から矛盾した箇所はほとんどみられないのである。

最後に光源氏の六条院の工期についても検討を行なった。光源氏の邸宅で、工期が比較的はっきりしているのは、二条東院と六条院である。

二条東院は、「澪標」巻に「二条の院の、東なる宮、院の御処分なりしを、二なく、改め作らせ給ふ」とあるのが、光源氏二十九歳の二月頃のことであり、さらに「松風」巻の冒頭に「東の院造りたてて」とあるのが三十一歳の秋である。途中、光源氏は工事を急がせているが、工期は二年半以上かかっている。改築に改築を重ねる形で工事が行なわれているので、完成に時間を要したのであろう。

それに対して六条院は、「乙女」巻によれば、光源氏三十四歳の秋に着工し、三十五歳の八月には竣工している。わずか十カ月ほどの工期である。同じ「乙女」巻に、式部卿の宮の五十歳の賀の祝いを新しい邸宅（六条院）で執り行なおうと考えた光源氏は、

「さやうの御いそぎも、同じくは珍しからむ御家居にてと、いそがせ給ふ」とあることから、造営工事を急がせたのである。しかし、四つの町をわずか十カ月とは、あまりにも早い。

当時、実際に寝殿造りの邸宅を建設するのに、どの程度の工期を要したのだろうか。藤原道長が新築した土御門殿は、長和五年（一〇一六）十一月二日に立柱が行なわれ、寛仁二年（一〇一八）六月二十七日に道長が新居に移ったとある。約一年八カ月かかっている。これと比較しても、六条院の工期はとても短い。

紫式部は一〇一四年から一〇一六年頃に亡くなったといわれるので、新築された土御門殿は知らないことになる。しかし、その前の東三条殿の造り替えなどは、見聞きしていたはずである。当時の工期がどの程度であったかは、当然知っていたであろう。その上で、物語において六条院をわずか十カ月で完成させた背景には、何があったのだろうか。

光源氏のような上級貴族が邸宅を建てる場合、実際の工事はその影響下にある地方の受領階級（国守、地方長官）などが受け持つことが多い。「澪標」巻に、二条東院を建てる時、「よしある受領などを選りて、あてあてにもよほし給ふ」とあることからも、それが分かる。

また藤原実資の日記『小右記』（寛仁二年六月二十日付）には、藤原道長が土御門殿の寝殿を造営する際、一間ごとに諸受領に担当させたとある。実資は、それを「未聞之事也」とし、道長のおごりを批判している（余談だが、新居の調度品の一切は源頼光が調え、呈上した）。実際に一間ごとに各受領が受け持ったか否かは不明だが、多くの受領たちが造営に参画したことは事実であろう。

したがって六条院もそうした方法で建設されたはずだが、太政大臣である光源氏の元へは、経済的にも人手の面でも提供を申し出る受領たちがあとを絶たなかったであろう。そうした受領たちが競いあって工事を急いだとあれば、十カ月の突貫工事も可能となる。紫式部は、この点でも、藤原家の氏長者である道長にも勝る、光源氏の比類なき栄華を、それとなく表現したのかもしれない。

◎復元作業を終えて

日本の歴史の中でも、もっとも華麗をきわめた王朝貴族の世界。その真髄を今に伝える『源氏物語』の舞台が、寝殿造りの邸宅であった。一年半に及ぶ六条院の復元作業を終えて、寝殿造りの印象を改めて振り返るとき、建物の仕様やデザインは簡素ながら、力強くおおらかな空間構成には、目を見張るものがある。

その内部は、几帳などの調度品によって仕切られるフレキシビリティー（融通性）に富んだ空間である。また「御格子」と呼ばれる蔀戸をあげれば室内と庭が一体化し、その境界に内と外を隔て、かつ結ぶ「御簾」を掛けると、開放性と閉鎖性が渾然一体となった独自の世界が構成される。そこには明暗、色彩などへの微妙で研ぎ澄まされた感性が息づき、たとえば「螢」巻には、光源氏が螢の光で玉鬘の顔を照らそうとする演出が見られるが、その印象的な闇と光の世界は、宇宙的ですらある。

平安という遠い昔、これほど洗練された生活空間が、すでに完成されていたことには驚くばかりである。寝殿造りの三次元の建築空間が、人々の生活に深みと輝きを与え、文学や美意識の背景となっていたともいえるのではないだろうか。

寝殿造りの建築そのものは、まだ解明されていない部分も多く、今後の発掘調査と研究が待たれるが、今回の復元作業が、一〇〇〇年の時を超えて、寝殿造りの空間に一歩でも近付く手掛かりとなればと願っている。

最後に、今回の復元にあたり、全体にわたりご監修戴いた文学博士・玉上琢彌氏、発掘調査に関する貴重な助言を戴いた京都市埋蔵文化財研究所所長・杉山信三氏をはじめ、多くの方々に御礼申し上げたい。

抜粋「六条院」

一、全体規模

六条京極のわたりに、中宮の御ふるき宮のほとりを四町を占めて、造らせ給ふ。 ［乙女］

二、全体構成

八月にぞ、六条の院造りはて渡り給ふ。未申の町は、中宮の御ふる宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住み給ふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせ給へり。 ［乙女］

辰巳（東南）の町
春の庭
山
池
丑寅（東北）の町
夏の庭
泉
馬場殿
厩

南の東は山高く、春の花の木、数をつくして植ゑ、池のさま面白くすぐれて、お前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩つゝじなどやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をばむら〳〵ほのかにまぜたり。 ［乙女］

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深く面白く、山里めきて、卯の花の垣根とさらにしわたして、昔おぼゆる花たちばな、なでしこ、薔薇、木丹などやうの、花のくさ〴〵を植ゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。東面は、分けて馬場の殿つくり、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲ふき茂らせて、向かひに御厩して、世になき上馬どもを整え立てさせ給へり。 ［乙女］

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色に かるべき植ゑ木どもを植ゑて、泉の水遠くすまし、やり水の音まさるべき蔵だて加へ、滝おとして、秋の野を遙かに作りたる、その頃にあひて、盛に咲き乱れたり。

西の町は、北面築き分けて、み蔵町なり。へだての垣に松の木しげく、雪をもてあそばむたよりにさせたり。冬のはじめ、朝霜むすぶべき菊の籬、われは顔なる柞原をさゝ〳〵名も知らぬ深山木どもの、木深きなどを移し植ゑたり。 ［胡蝶］

南の池の、こなたにとほし通はしなさせ給へるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山のさきよりこぎまひて、

南の町もとほして、遙々とあれば、

この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行きかよはして、け近く、をかしきあはひにしなし給へり。 ［胡蝶］

三、辰巳の町の構成

寝殿　南の寝殿に移りおはします。 ［藤裏葉］

東の対　かねて御消息ともありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつゝおはす。 ［初音］

西の対　大きやかなる薫の、濃き紅紫苑の織物かさねて、赤朽葉の羅の汗衫、いとゝいたう慣れて、廊、渡殿の反橋を渡りて参る。 ［乙女］

渡殿　若菜参りし西の放出でに、御帳立てて、そなたの二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせ給へり。 ［若菜・上］

東の釣殿　東の釣殿に、こなたの若き人々集めさせ給ふ。釣殿にさし寄せられておりぬ。 ［胡蝶］

中島　中島の入江の岩藤にさし寄せて見れば、はかなき石のたゝずまひも、たゞ絵にかいたらむやうなり。こなたかなた霞あひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははる〳〵と見やられて、色をましたる柳、枝をたれ、花もえもいはぬ匂をちらしたり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにほゝゑみ、御前の庭にかゞり火ともして、御階のもとの苔の上に、楽人召して、上達部、親王達も、皆おの〳〵弾物吹物とり〳〵にし給ふ。 ［蛍］

四、丑寅の町の構成

東の対　山の紅葉いづかたも劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、右近の陣の御溝水のほとりに准へて、西の渡殿の下より出づる、みぎは近う埋ませ給へるを、 ［藤裏葉］

西の対　寝殿の東、面、桐壺は若宮具し奉りて、参り給ひにし頃なれば、こなた隠ろへたりけり。やり水などのゆきあひはれて、よしあるかゝりの程を尋ねて立ち出づ。 ［若菜・上］

東釣殿　西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き困じて、女房もおの〳〵局にありつゝ、おまへはいと人ずくななる夕暮に、大将殿なほし着かへて、今日まかづる僧の中に必ず宣ふべきことあるにより、釣殿の方におはしたるに、皆まかでぬれば、池の方にすゞみ給ひて、人ずくなるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかりたてて、うちやすむ上局にしたり。 ［蛍］

馬場殿　東の対の方に、面白き笛の音、箏に吹きあはせたり。 ［蛍］

遣水　丑寅の町の西の対、文殿にてあるを、他方へ移してと思ず。 ［梅枝］

いとあつき日、東の釣殿に出で給ひて涼み給ふ。 ［常夏］

馬場の大殿は、こなたの廊より見通す、程遠からず。（源氏）「若き人々。渡殿の戸あけて物見よや。 ［常夏］

遣水　いと涼しげなる遣水のほとりに気色ことに広ごり臥したる檜の木の下に、打松おどろ〳〵しからぬ程におきてさし退きてともしたれば、御前の方はいと涼しくをかしき程なる光に、女の御様見るにかひあり。 ［篝火］

五、未申の町の構成

東対　中将おりて、中の廊の戸より通りて参り給ふ。朝ぼらけのかたち、いとめでたくをかしげなり。東の対の南のそばに立ちて御前の方を見やり給へば、 ［野分］

中の廊　宮のおはします町の寝殿に御しつらひなどして、 ［若菜・上］

寝殿　中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせ給ふ。 ［藤裏葉］

中門　かの明石の御町の中の対に渡し奉り給ふ。こなたはたゞおはきなる対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、御修法の壇ひまなく塗りて、いみじき験者ども集ひて〳〵しる。 ［若菜・上］

六、戌亥の町の構成

対　「六条の院には離れたる屋ども倒れたり」など人々申す。 ［若菜・上］

廊

七、その他

雑舎 ［野分］

『源氏物語』文中より、六条院の建物関係記述のうち、今回の復元の参考として主な描写を抜粋しました。

「源氏物語　玉上琢彌訳注」角川文庫より抜粋